

# 広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』から見る多木浩二 —イメージとテキストの総合—

氏名 飯沼 珠実<sup>※1</sup>

## 概要

本調査は、多木浩二が1962年から1971年にかけて携わっていた広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』の分析を通して、1968年以前の多木がどのように表現や思考を発展させていったのかを明らかにする試みである。これが1968年以降の多木の、写真や出版、評論といった創作活動を紐解くための新たな手がかりとなることを期待する。

## 研究背景と目的

多木が写真や出版、評論といった創作活動を通じて目立った成果を上げ始める1968年以前には、どのような活動を行っていたのか。

2023年現在において、1968年以前の多木の仕事を総覧できるような書籍やアーカイブは存在せず、また多木自身が後年に振り返る形での言及もほとんどないため、不明な点が多い。

1968年以前の多木の仕事のうち、その中心にあったのは旭硝子株式会社の広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』（以下『GA』）といえるだろう。同誌の「発行所」としてクレジットされる「株式会社 arbo」は、多木が設立した編集・デザイン事務所で、「企画、編集、執筆、撮影」を担当したとされる（『日本美術年鑑 平成24年版』、中央公論美術出版、pp. 431-432）。

『GA』は、36ページ前後の月刊誌だ。その編集・制作を担当したarboの中心人物である多木が大きな時間と労力を投じてこの仕事に取り組んでいたことは、誌面をみればすぐに理解できる。このことから多木の創作概念・思想形成の過程を知る上で、『GA』は重要な手がかりになると考える。

「誌面」を単位とした表現実践において、イメージとテキスト、あるいはそれらの総合（モンタージュ）はどのような広がりを見せるのか。申請者は、本調査において1968年以前の多木がどのように表現や思考を発展させていったのかを明らかにするために、『GA』の誌面の分析を試みる。対象は、arboが発行所としてクレジットされる1962年1月号から1971年1月号までのうち、1967年9月号までとする（この号が、arboの担当期間内において多木の個人名がクレジットされる最後の号となるため）。

とりわけ『GA』のテーマである「ガラス」は、この時代に多木が自らの「ことば」を構築していく特別なモチーフだったように思われる。後年の多木の作品制作・批評実践をみていくと、多木が「ガラス」というモチーフと出会うことが、必然であったようにも感じられてくる。

本調査の成果は、小論文「広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』からみる多木浩二——イメージとテキストの総合」として提出する。

※1 武蔵野美術大学版画研究室特別講師

## 研究成果と考察

本調査の成果は以下の通りである。

なお本稿内で『GA』の各号数は、刊行年月を省略した形で表記する。たとえば、1966年5月号は「66-5」とする。

- ①『GA』の現物収集・複写（デジタル、紙のコピー）
- ②小論文「広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』からみる多木浩二——イメージとテキストの総合」（約25,000文字）
- ③小論文の別添資料（関連図版集と『GA』における多木浩二のクレジットリスト）

以下、各項目について説明する。

①『GA』の現物収集・複写について調査対象である『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』については、可能な限り現物を収集し、本調査遂行目的の範囲で複写（デジタル）を行った。収集不可能なもので、所有者からの貸出が叶ったものは、同目的下で複写（デジタル）を行った。収集および借用が不可能なものは、主に国立国会図書館で閲覧、重要と思われるページの複写（コピー）を行った。比較対象とした同時代の雑誌、広報誌等の資料についても、同様である。

以下、参照した資料を記載する。

- 広報誌『GLASS&ARCHITECTURE』（旭硝子社）1962年1月号から1971年1月号までを閲覧、うち34号分を購入・複写（デジタル）、うち11号分を所有者より貸借・複写（デジタル）、ほかは国立国会図書館所蔵の資料から重要と思われる記事のみを複写（コピー）。
- 広報誌『みんなのガラス』（旭硝子社）1964年1月号から1971年1月号までを閲覧、国立国会図書館所蔵の資料から重要と思われる記事のみを複写（コピー）。
- 広報誌『SPACE MODULATOR』（日本板硝

子社）1960年春号（創刊号）から1971年冬号までを閲覧。

- 広報誌『approach』（竹中工務店）1964年春号（創刊号）から1972年冬号までを閲覧、複写（デジタル）。
- 広報誌『ヒノニュース』（1966年5月号からは『HINODE 日ので』）1962年3月号より1970年12月号を閲覧、重要と思われる記事のみを複写。
- Le Corbusierほか編『L'ESPRIT NOUVEAU』vol.1-28, 1920-1925 すべての号のデジタルデータを譲り受けた。

ほか

②小論文「広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』からみる多木浩二——イメージとテキストの総合」について本調査で実施した分析および考察を、小論文「広報誌『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』からみる多木浩二——イメージとテキストの総合」（約20,000文字）としてまとめた。

以下、目次を示す。

はじめに

第1章 実験場としての広報誌

1-1 「企業広報誌」の時代

1-2 『ガラス GLASS &

ARCHITECTURE』と多木浩二

1-3 arboの視覚言語

第2章 『GA』において／によって展開された批評

2-1 クレジットの有無に見られる傾向

2-2 海外建築のフィールドワーク（66-3から66-7まで）

2-2-1 66-3「壁のなかの世界」

2-2-2 66-5「glass and

architecture in milan」

2-2-3 66-7「白の空間 そこでは光が主役であった」

第3章 「環境芸術」としての『GA』—— 67-9「特集 expo 67」

3-1 コミュニケーションの媒体

としての「ガラス」  
3-2 ガラスと建築  
3-2-1 EXPO 67の建築  
3-2-2 EXPO 67の建築とガラス  
3-2-3 ディスプレイとガラス  
3-3 「アートディレクター」としての多木浩二  
おわりに

以下、各章の要旨を記述する。

## 第1章 実験場としての広報誌

当時の企業広報誌を取り巻く状況について確認した。高度経済成長期に各社が潤沢に予算をかけて発行した広報誌の制作現場は、戦前からのプレイヤーのみならず、当時はまだ新進気鋭のクリエイターが集まっていた。

そのなかで『GA』の誌面は、「企業広報誌」に求められる客観的な説明や演出からは逸脱したような、他誌と比較しても実験的で作家性の強い表現が見受けられる。第1章では、『GA』の誌面のみならず、arboが手掛けた別の広報誌『みんなのガラス』（旭硝子社）も参照しながら、arboの視覚言語を検証する。

## 第2章 『GA』において／によって展開された批評

第2章では、多木のクレジットが入っている記事に対象を絞り、『GA』における多木の実践を分析する。

具体的に取り上げるのは、海外建築を取材した1966年のシリーズである。

66-3 「壁のなかの世界」

66-5 「glass and architecture in milan」

66-7 「白の空間 そこでは光が主役であった」

上記の記事の分析を通じて、1966年の海外建築取材シリーズが『GA』のための仕事であると同時に、多木自身の作品制作・批評実践のためのリサーチにもなっていたこ

と、それがテキストとイメージの総合としての「誌面」による批評活動となっていたことを確認する。

## 第3章 「環境芸術」としての『GA』——67-9「特集 expo 67」

第3章では、例外的に1号全体を多木が手がけたモントリオール万博特集号（『GA』67-9）を扱う。

多木は本特集において実際に現地を取材し、写真とテキストをほぼ一人で用意している。それは万博のルポであると同時に、独自の「万博論」にもなっている。注目すべきは、過去の『GA』でもたびたび取り上げられてきた「ガラス」というモチーフについての思考が、ここで全面的に展開されていることである。

また、そこでは万博およびガラスを通じて、ある種のメディア論およびメディア実践が展開されている。それを読み解いていくと、多木は単なる著者や写真家には留まらず、いわば「アートディレクター」として、『GA』というメディアを構築していったことが見て取れるようになる。

本稿は、多木が『GA』と同時期に写真の収集から構成までに携わった写真展「写真100年 日本人による写真表現の歴史」（1968）の内容をまとめた書籍『日本写真史 1840-1945』（1971、平凡社）で述べられる「（写真と文字（記号）の）総合によるモンタージュ」を結びとする。

このことは、まさに本稿で述べてきた「誌面」という単位での表現実践ともいえるだろう。また、このような機会が、建築、美術、批評といった業界ではなく、時代に支えられた産業がもたらした「企業広報誌」によるものであったことは興味深い。

そして、そこで多木に与えられた「ガラス」というテーマが、その作品制作・批評実践そのものへの省察を迫るようなものであったことにも、偶然とは思えないような結びつきが感じられる。『GA』を通じて行われた「イメージとテキストの総合」の実践は、後の多木の創作活動そのものにも深い影響を与えているのではないだろうか。

### ③小論文の別添資料について

小論文の別添資料として、関連図版集と『GA』における多木浩二のクレジットをリスト化した表「『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』(1962.1-1971.1) 多木浩二のクレジット」を作成した。

以下、図版の内容を記載する。

#### 第一章

【図版①】62-3 連載「ガラス工場見学記 7」, 【図版②】62-8 連載「ガラス工場見学記 11」, 【図版③】62-12 連載「ガラスの汚れ—顕微鏡でみた」, 【図版④】64-10 連載「SPACE 64 動いている系」, 【図版⑤】64-4 連載「DETAIL 4」, 64-8 連載「SPACE 64」, 【図版⑥】連載「SPACE 66」より, 【図版⑦-1】68-2 扉「設備のプレファブ化」、同号 扉「風圧とガラス」, 【図版⑦-2】68-5 「表紙」、68-11「表紙」、69-6「表紙」, 【図版⑧】66-5 写真構成「glass and architecture in milan」, 【図版⑨-1】駒沢オリンピック公園 『GA』64-8 連載「SPACE 64」, 【図版⑨-2】駒沢オリンピック公園 『みんなのガラス』64-5 連載「現代の建築 5」, 【図版⑩-1】鉢山社宅 『GA』64-1 特集「鉢山社宅」, 【図版⑩-2】鉢山住宅 『みんなのガラス』65-3 連載「みんなのガラス 3」 【図版⑪】65-4 写真構成「光のあしおと 訪問童貞会修院(鎌倉)」, 【図版⑫】65-5 写真構成「フレームレス・ガラス・ウォール 旭硝子研究所ロビー」, 【図版⑬-1】63-11「表紙」(板ガラス), 【図版⑬-2】65-2 写真構成「COLOR・LIGHT・GLASS」, 【図版⑭】66-1「表紙」(イタリアの窓), 【図版⑮-1】64-5「表紙」(不明), 【図版⑮-2】65-5 論考「ものとしての認識と透過性 ガラスデザインへの可能性」に添えられた写真, 【図版⑯】66-3「表紙」(ロンシャンの教会), 【図版⑰-1】67-2「表紙」(パリ国立工業技術センター), 【図版⑰-2】66-1 写真構成「ヨーロッパの壁<1>」, 【図版⑱】66-3 写真構成「壁のなかの世界」, 【図版⑲-1】66-7 写真構成「白の空間 そこでは光が主役であった」, 【図版⑲-2】⑲-1と同

被写体(ブストアルシージオの職業学校)を取り扱った『インテリア JAPAN INTERIOR DESIGN』(1969年2月号)記事との比較。、【図版⑳】67-9「1. EXPO 67の建築」の掲載写真(アメリカ館、テーマ館<Man in the community>、フランス館)を『approach』(1967年夏号)に掲載の同被写体カットと比較。、【図版㉑】67-9「3. ディスプレイとガラス」の掲載写真(テーマ館<Man in the community>内部空間)を『approach』(1967年夏号)に掲載の同被写体カットと比較。、【図版㉒-1】67-9「表紙」(ケベック州館), 【図版㉒-2】67-9「2. EXPO 67の建築とガラス」(ケベック州館), 【図版㉓】67-9「3. ディスプレイとガラス」(ベルギー館)

併せて『GA』における多木浩二のクレジットの表記をリスト化した表「『ガラス GLASS & ARCHITECTURE』(1962.1-1971.1) 多木浩二のクレジット」を作成、小論文の別添資料とする。

#### 参考文献

- 多木浩二著『写真論集成』岩波現代文庫, 2003
- 池田喜作著『PR誌ハンドブック』1981, 視覚デザイン研究所編
- セゾン美術館ほか編『「芸術と広告」展 図録』朝日新聞社, 1991
- 日本写真家協会編『日本写真史 1840-1945』平凡社, 1971
- 名取洋之助著『写真の読みかた』岩波新書, 1963
- 『デジャ=ヴュ(第19号) バウハウスの写真』1995, 河出書房新社
- 寺山祐策ほか編『エル・リシツキー 構成者のヴィジョン』武蔵野美術大学出版局, 2005
- Le Corbusier著『RONCHAMP』Gerd Hatje, 1957

ほか